

## 「栄光に富んだ相続」

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19

March.27.2022

### エペソ人への手紙 1 : 17 - 19 (パウロ)

#### Preface

使徒パウロは、神様のことを知ることが出来るようにと、特に3つのことをエペソ教会の人々が知ることが出来るようにと願い、知恵と啓示の御霊を求める祈りを献げました。

前回は、その3つの願いのうちの一つ、神様がどのような望み、または期待をもって私たちを召し出したのかについて学びました。

そして今朝は、それに続く二つ目の内容、「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものかを知れるようにしてください」ということについて考えていきたいと思えます。

#### Part One

キリストを信じ生きる聖徒たちが受け継ぐものについては、これまで何度か話してまいりました。

魂の救いゆえに、この地上の朽ちる命で終わる人生ではなく、朽ちることのない栄光の体と永遠のいのちを与えられ、二度と悲しみや痛みの涙を流すことも死も苦しきもない神の栄光が照らす都に入れられ、用意された義の栄冠を受け、キリストとともに共同相続人として世々限りなく王として治めること、これがキリストを信じ生きる聖徒たちが受け継ぐものですが、この栄光に富んだ受け継ぐものについて私たちの言葉で言い表すことは不可能です。

「イエス様が行われたことを一つ一つ書き記すなら、全世界をもってしてもその書物を収められないほどだ」と、ヨハネの福音書の最後で言っていますが、それと同じように私たちが受け継ぐものの栄光はあまりにも不思議で、あまりにも驚きで、あまりにも完璧であるがために、私たち人間の言葉ではその在り様を表現しきることは出来ません。

そのため、その栄光を記録しているヨハネの黙示録などの記述が難解に思えてしまうのも、ある意味致し方ないことだと思います。

また、私たちの言葉自体も、その栄光を記述するにはあまりにも大きな問題を抱えています。

それは、神のかたちに造られた人のみに与えられた大切な特徴である言葉そのものが、私たちの罪ゆえにその価値が貶められているために、その栄光の豊かさを書き表そうとしても無用な考えが入り、栄光を描写しているはずなのに、むしろ栄光を削り取ってしまうことになるでしょう。

それでも、神様はそんな足りない私たちの言葉を用いて、ご自分の栄光と私たちが受け継ぐものの栄光を聖書に記録させ、その栄光に私たちを集中させようとされます。

では果たして、この栄光がどれほど豊かで、潤沢で、どれくらいことなのかを実感しながら生きることが出来ているだろうか？

その実感が、生き方に表れているだろうか？

いや、ぜひそう生きられるようにと願い、パウロは祈りました。

キリストにある聖徒たちが受け継ぐものの栄光が、どれほどに富んだものであるのかを知ることほど、生きる勇気や動機を与え、聖なる刺激を受け、日々の暮らしの中に賛美をもたらすようなウキウキを積み重ねさせ、そして、キリスト者の暮らしを神の栄光の内に生きたいと思わせるものはないでしょう。

パウロがまだクリスチャンになる前、クリスチャンたちを取っ捕まえるためのダマスコへの途上で、神様の栄光に突如として照らされたことがありました。復活された主イエス様のご栄光をその時見ました。

ただ見たはいいけれども、あまりにもその光がまぶしくて、三日間目が見えなくなるばかりか、食べることも飲むことも出来なくなっていました。

当然、そんなものすごい経験を忘れることなんか出来ません。

さらにパウロは、第二コリント12章に記されていますが、このエペソ書を書く14年前には、この大空でもなく、遠大な大宇宙でもない第三の天、つまり、天の御国に引き上げられる経験をします。

そこで、パウロは、実際に言葉ではとても言い表すことの出来ないほどの天の御国、神の国の栄光を見て、また人間が語ることを許されていない言葉まで聞きました。

パウロが使徒として働いた時代は、まだ新旧約聖書66巻が完成していませんので、パウロが人々に主イエス様を宣べ伝えるにあたって揺るぐことのない確信をもって宣べ伝えることが出来るようにと、特別な恩恵で特別な体験を神様がさせてくださったのかもしれませんが。

ほんの少しではあったものの、実際に天の御国の栄光を肉眼で見えてしまったので、それを忘れることが出来ないのは当然、それこそ人が得られる最大の栄光であって、実体であって、答えであって、すべてであって、キリストを信じる聖徒たちにとって最大の賞であり、相続であることを実感として知ったために、祈るんです。

その栄光がどれほどに富んだものであるのかを、キリストを信じる聖徒たちが知恵と啓示の御霊によって心の目が開かれて知れるようにと、実感を込めて祈るんです。

私たちは、受け継ぐものの栄光の豊かさを知れば知るほど、肉的な知恵によらず、神の恵みによって行動したいと、パウロがそうであったように不思議と思えてきます。

「自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼りたい。その神が私と顔と顔を合わせてお会いするその時を今か今かと待っていて下さっているから、今を準備をしたい」と、不思議と思えてきます。

## Part Two

ひと月ぐらい前のオープン礼拝に出席した時、ある思いに満ちて、涙がこみ上げてきました。

賛美を歌っている時なのか、説教を聞いている時なのか、はっきり思い出せないのですが、「今、イエス様が僕の目の前に現れて、僕の方に歩み寄って来てくださったらいいなあ」という思いとともに、黙示録の「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる」という御言葉が頭の中を巡りました。

そして、「ああ、僕が天の御国に行ってイエス様とお会いした時流す涙は、人生が苦しかったから悲しかったから流す涙でもなく、遂にイエス様にお会いできてうれしくて流す涙でもなく、ただただイエス様に何だか申し訳なくて、でもそんな申し訳ない気持ちさえも遥かに越えて知っていてくださっていて、手を伸ばして下さっていることに対するまた申し訳ない思いの、感謝の涙なんだ！」と、一瞬のうちに思えてしまいました。

そのオープン礼拝のひと時を通して、キリストを信じながら生きる者たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものであるのかの、ほんのほんの少しを垣間見させていただいた気がしました。

また、私の趣味がサーフィンであることは、皆さんもう既にご存知だと思えますが、海に行けるのは週1回2時間のサーフィン、休みが重なった時に週2回行ける時がたまーにある程度です。

で、思ったんです。

「毎日サーフィン出来る人、または、行きたいと思った時にすぐに海に行ける距離に住んでいる人は何て幸いなんだろう」と。

で、そんな思いを胸に、頂いた遅めの夏休みを利用して、「よし、この1週間、サーフィン三昧にしよう！」と意気揚々と海に行った時のことですが、火曜日から土曜日まで一生懸命働いて、日曜日の主日礼拝の奉仕を一日全うして、やっとの思いで月曜日の朝、海に入った時のあの清々しさと、感謝な思いと、イエス様を信じて歩めていることがこんなにもうれしいことなんだと、また、ただ何だかよくわからない得体の知れない自然の中に身を置くのではなく、神様の深いご意思と美しさが投影されながら造られた自然であることを覚えながら海の中に

身を置ける壮大さなど、週1回月曜日のサーフィンの時ほど感じないんです。  
なんか、淡々としているんです。

「あれっ」と思いながら、その時気付かされました。

「わたしは、あなたをサーフィンするために生まれさせ生かしているのではない。イエス・キリストにより頼み、イエス・キリストに生かされていることをリアルに感じながら生き、その感じたリアルを、イエス・キリストの愛を、イエス・キリストの御言葉を宣べ伝えるために生まれさせ、生かしているんだ」という思いが巡りました。

「このことなくして、サーフィンをしたところであまり楽しくない」ということに気付かされてしまいました。

「主の望みと期待に生きようと努め、受け継がせていただくものの栄光の豊かさが無かったら、あんなに楽しいサーフィンでさえも、空しく果かないものになってしまうんだ」という重大な事実を、伝道者の書の言葉のように淡々と知ってしまいました。

それからはちょっと心を入れ替えて、「365日サーフィンできることに憧れる人生ではなく、牧師としてしっかり生きよう、キリストにあって私たちのために主なる神様が用意してくださっていることのために生きよう」と思えるようになりました。

だからと言って苦しみが無いわけではありません。

毎日葛藤し、自分の能力のなさに怖気づき、苦しみますが、『私たちの一時の軽い苦難は、それと比べものにならないほど重い永遠の栄光をもたらすのです』という御言葉に生きるよう努めたい」と思えるようになりました。

### Part Three

#### ヨハネの福音書14：1-3 (パウロ)

前回のメッセージの時、「生活の思い煩いに押しつぶされて、主イエスの再臨とともに天地が消え去るその日が、罨のように望むことが無いようによく気を付けなさい」というイエス様の言葉を見ましたが、ここでもイエス様は、「心を騒がせてはならない」と仰います。

心を騒がせない根拠をイエス様がどこに置いているのかと言いますと、“父なる神様の家、つまり天の御国には住む場所が沢山あって、その住む場所をイエス様が用意しに行かれるということ”にあると仰います。

「私たちの生活の思い煩いや心を騒がせない根拠は現生に、この今存在している世界にあるのではなく、来世、来る世にある」と仰るのです。

この世界を生きる上で思い煩わず、心を騒がせない根拠をこの世の世界に見

いだされるのではなく、来る世界に見出します。

こう言いますと、ほぼ必ず出てくる反論のようなものが、「あなたがたは、現実に対する責任と問題の直視を避けている。

不条理な主張によってねじ曲げられている問題が、ここかしこにあるのに、まーた雲をつかむような話をして、今すぐに提示できる方策が無いから、来る世とかという名のもとに誤魔化そうとしている。

そんなことを考える暇があつたら、もっと社会に目を向けて、国家間の争いを止めるとか、庶民の福利厚生を充実させるとか、天災や環境問題にもっと取り組むとか、より良い社会を作り出すために、教会がクリスチャンが一致団結して、もっと世の権力に訴えかけて行ってこそ、あなたがたの存在価値があるんじゃないですか？

それこそ社会の一員として責任を全うし、世の光、地の塩の役割を果たすことになるんじゃないですか？」というようなことです。

もちろん、このような言葉はそれらしく聞こえますし、決して間違っている話でもなければ、キリスト者として考え取り組んで行かなければならないことでもあります。

でもしかし、まかり間違いますと、「上にあるものを思いなさい。地にあるものを思つてはなりません」というコロサイ書3：2の言葉に反し、目に見えるものによるひと時の幸福がすべてで、その目に見えるものを充足することだけをもって、信仰を言い表そうとすることにもなりかねません。

このような反論や主張は、昔からずっと、今の今に至るまであり続けています。

激しい迫害ばかりか、混沌とした不条理な社会構造の中で生きなければならなかったパウロの時代もそうでしたし、

ともすると奇跡を求め、目に見えるイスラエル国の復権と名誉に固執するイエス様の時代もそうでしたし、

「肉とパンが腹いっぱい食べられないなら、奴隷でいた方がマシだ」と言い放った旧約聖書の時代もそうでした。

そして現代のクリスチャンの視点も、往々にして、来世的ではなく現生的だと言えるかもしれません。

言うなれば、今いい暮らしをすること、今勝利すること、今楽しいこと、今幸福であることにばかり目が行き、心が向きます。

これは一種の経済的な成長と裕福ばかりを追い求める社会に生きていることの副作用とも言えるでしょう。

少なくとも、イエス様も、パウロも、聖霊の証印を押された弟子たちや使徒の働きに登場してくるキリスト者たちは来世的でした。

来世的な信仰というのは、一日も早く死ぬこと、そして一日でも早く主イエス様にお会いすること、一日でも早く二度と悲しみも痛みもないところに行くことが大きな希望であり目標である信仰、これが来世的な信仰です。

事実パウロ自身も、「出来ることならば1日も早く死んでこの肉体を脱ぎ、今すぐにでも天の御国に行ってキリストとともにいたいけれども、福音を宣べ伝え一人でも多くの人を天の御国に送り届けるという使命ゆえに、召命ゆえに生きている。生きることはキリスト、死ぬことは益です」と、天の御国に思い焦がれて、今と言う時をしっかりと踏みしめ、聖なる目標を見失うことなく生きました。

ですが、今の世の中、お腹も満たされて、やりたいこと、遊びたいこと、行きたいところ、見たいもの、聞きたいもの、手に入れたいものが沢山ありすぎて、早く死ぬわけにはいきません。

終いには、「来る世でいただく祝福よりも、今この世界での祝福を下さい」と祈ることもあります。

来る世に対する希望よりも、朽ちていく今この世界での希望を頂くことの方が幸いに思えてしまいます。

もちろん、この世界で幸いを覚えながら生きる上で必要な物品や娯楽やレジャーも大切ですし、それらを支配しておられるのも神様ですし、それらを与え私たちに喜びを味合わせ、喜んで生きることを喜んでくださる方も神様です。

しかしもし、イエス様の仰る幸いを、世の説く、サタンが説く幸いとはき違えてしまったならば、それはまことの幸いではないでしょう。

日曜日の礼拝で語られる説教も、天の御国とかその栄光の話とか、終末とか再臨の話はあまり人気がないものとなり、牧師も段々と語らなくなります。

「天の御国の栄光とか、来る世のこととか、世の終わりのこととか下手に話したら、ノストラダムスの大予言みたいに、教会やキリスト教のことが変に怪しまれちゃうからね」というような思いからでしょうか？

私の13年前の正教師試験の課題が、聖書の教える終末や再臨だったので、同盟教団から発行されている信徒のための教材にどれくらい終末や再臨について書かれているのか全部見てみたところ、ほとんどありませんでした。

入っていないはずのあんこが入っていない餅、乗っていないはずのネタの代わりにガリが乗っているシャリのような感じがしました。

来る世、新しい天と地に入るための主イエスによる救いであり、そのための福音であるはずなのに、それなくして何が福音になるのでしょうか？

## Part Four

聖書は、来る世、またはキリストを信じる聖徒たちが受け継ぐ神の国の栄光を、現実離れした雲をつかむような話として、してはいません。

むしろ、今という現実を生きるため、今という現実を真っすぐに見据え、現実  
に即したものとして語っています。

じゃ、現実とは何か？

現実とは、至って単純に言うならば、今日という日です。

でも今日という日は、明日という期待と、明日という目標がなければ今日という日はありません。

すべての今日という現実、明日私が何をするのか、明日私が何を望むのか、明日私が何を  
得たいのかという未来についての確固たる期待と目標が設定されない限り、今日という日を  
平安のうちに生きることが出来ません。

取捨選択することも出来ず、決定することも出来ません。

明日という目標と目的が定まっていないのに、どういう基準で、どこに私たちの力と知恵を  
集中することが出来るでしょうか。

聖書の教える来る世は、現実を否定し、現実がないかのように生きさせようとしているのではなく、  
今どのように生きるのか？ 確かな聖なる目標と目的をもって、今日をどう生きるのかを決め、  
決定し、集中し、努力し、決済し、忍耐する根拠であって、「新天新地という名のもとに、  
現実逃避をして今日という日が無いかのように生きましよう」ということではないですね。

### テモテへの手紙第二 4 : 1 - 5 (パウロ)

(パウロの最後の言葉、遺言の言葉です)

何でこんなことをパウロは、テモテに要求できるのでしょうか？

生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前に立ち、神の国の現れを、  
来る世に対する望みがなければ、こんなこと言えません。

どんなことがあっても、来る世についての御言葉を宣べ伝えなければならぬということが  
人生の最重要項目になることもないですし、このために他のどんなことを犠牲にしてまでも  
選択しなければならない理由にもなりません。

続くパウロの言葉を見てください。

### テモテへの手紙第二 4 : 6 - 8 (パウロ)

私たちは再びイエス様にお会いします。

そして、この世の終わりは確かにきますし、私たちが天の御国で、または新天

新地で主にお会いする準備をしなければならぬという考えを捨てたら、私たちの現実、今日という日は何になるでしょうか。

もう一つ続きを見てみます。

#### テモテへの手紙第二 4 : 9 - 10 a (パウロ)

デマスという方は、再び主イエス様にお会いすることを準備する、または、私たちの受け継ぐ栄光の豊かさを選取るよりも、今の世を愛しパウロを見捨てました。

聖書の教える来世観は、「今日という現実を目をつぶって流されていきましょ

う」という口実ではありません。  
実のところ私たちは、どんな原理を基準として生きるのかが決まっていなければ、現実社会というところで何のために、その現実と社会に参与も出来なければ貢献することも出来ません。

人は、永遠という時間の概念を超えたものの中でその現実と人生を見据えた時のみ、自分のことだけを考える個人主義や自己中心的な欲望を超越することが出来ます。

絶対のない世界にあって、絶対を準備できること、もし来る世とか、絶対なるお方がおられることを認識出来ずに、この世界にだけ執着して生きるならば、生きることは、生き地獄になってしまいます。

### Part Five

ヘブル書 11 章には、この世よりも、この次の世界に目を向けていった旧約聖書の多くの信仰者たちについて記していますが、彼らは、現実逃避をして山に籠った人々ではなく、まだ目には見えていない来る確かな世界に目を向けて、自分たちの生きた現世界にその信仰を適応させながら生きた人たちです。

これは聖書の中だけの話ではありません。

私たちの歴史や社会においても最も重大で大きな貢献や寄与をした人たちを見ますと、永遠に対する眼目があった人たちです。

例えば、病院などの医療施設は、キリストを信じる信徒たちから始まりました。人とその人生を永遠という光によって照らし出した信仰者たちは、常々人間の霊的な痛みのみならず、肉体的な痛みについても大きな関心を持ちました。それが医療行為を施す施設・機関として現れたわけです。

また、労働組合なども福音を信じて救われた人々の活動によって存在するようになったのも歴史的事実です。

元々、労働組合は、労働搾取をしている資本家たちへの労働者たちの反発を組

織化したものではなくて、労働者たち自身が自分たちの人生を投げ捨てているかのように深酒に、悪行に、無知に生きているその生き方を変え救済するために、キリスト者たちが立ち上がった活動が起源です。

もちろん、キリスト教国家とか、キリスト者という人たちによる戦争とか略奪などの事実もありますが、それは聖書が教えたことではなく、キリスト教という名のもとに自分たちの欲望や恐れを満たす所業であって、聖書がそれを要求したためしはないですね。

現代社会の基盤を作っている教育、学校、文化、産業、医療、福祉の起源だったり、その改革改善を目指し志した人たちは、皆が皆、主イエス・キリストの前に跪き、霊的覚醒復興を経験し、永遠のいのちと来る世の重要性を認識した人たちであったことは歴史的事実であり、しっかりと知っておく必要があります。

ただ残念ながら、それらの事実が、現在の一般教育で教えられることはほとんどないので、知らないことの方が常になっています。

神に愛され、神がご用意くださっている富む栄光に思いを馳せることの出来る人たちは、明確に自分という人だけがすべてではなく、他者が隣人が愛の対象になります。

そして、そんな彼らが社会に貢献出来たのは、今は目には見えないけれども、将来確かに目に見える形で訪れる来る世、御国の栄光、天の故郷を今準備する信仰ゆえに、遥かに現実的で、現実を見据えることが出来たからです。

万が一、永遠という視点から私たちの活動や生き様を規定することが出来ないならば、人類は退廃することでしょう。

## Conclusion

今日、真正な聖書的清潔が不足している理由は、私たちが受け継がせていただく栄光を黙想し、思い巡らすことに十分な時間を持つことが出来ていないからではないでしょうか。

世の中は、この世界は、私たちにとって、あまりにも大きく複雑なものとなりました。

そのためか、私たちに臨む栄光の光に照らし合わせて私たちの救いを考えるよりも、私たちの日々の暮らしにおける肉的経験という次元でのみ、私たちの救いを捉えようとしてしまう傾向が強いように思えます。

イエス様は最初から最後まで、羅針盤の針が常に北を向き続けるように、父なる神を、天の御国を、来るべき世を、そして、そこにあるまことの栄光へとその視点ばかりか、体全体、魂霊のすべてが向いておられました。

そして、私たちもそうであるようにと願い、祈ってくださいました。  
イエス様の十字架に架かれる前の最後の祈りにその内容が出てきます。

### ヨハネの福音書 17 : 24 (パウロ)

世界の基が据えられる前から父なる神様と分かち合った栄光を、イエス様は、私たちとも分かち合えるようにしてくださいと祈られました。

使徒パウロの祈りは、イエス様の祈りに倣った祈りであり、また私たちの祈りでもあり、この祈りが私たちの祈りであるようにと祈っておられます。

私たちは、天の御国のことを考えるために、どれほどの時間を投資しているでしょうか？

私たちは、天の御国にどれほどよく視線を向けているのでしょうか？

私たちは確かに一度心の目を開かせていただいて、こういう霊的祝福を知れる者となりました。

だからこそ、牧師としてためらわず、躊躇せず言いたいと思います。

私たちが霊的であればあるほど、それを追求すればするほど、天の御国について、もっとたくさん考えるようになることでしょう。

私たちがイエス・キリストに近く行けば行くほど、目を離さなければ離さないほど、用意されている栄光の豊かさを思い巡らすことでしょう。

これこそ、パウロの言うあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神についての知識に満たされることです。

お祈りいたします。

祝祷：コロサイ人への手紙 1 : 9 b